

眉村卓



TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

5

〈エクレーダ
交戦〉



TOKUMA NOVELS

眉村 卓

不定期エスパー ⑤ （エクレード）
（交戦）

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

©Taku Mayumura 1989

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

編集担当 磯谷 励

ISBN4-19-153906-X

眉村卓



TOKUMA NOVELS 長篇青春冒険ロマン

不定期エスパー

5

ヘクレーダ
ヘ交戦

16-X C0293 P700E(1) 定価=700円
(本体=680円)

不定期エスパー^{ふていき} 5・眉村卓^{まゆむら たく}



書収録分は、一九八五年一〇月号から一九
六年一二月号にわたって『SFアドベンチ
ー』誌上に掲載されたものである。この長
な物語も急展開を見せ始めているが、現在
一行中の連載でも様々な謎が解き明かされ、
よいよクライマックスに向かおうとしてい
る。読者からの熱き声援を、お願いしたい。

TOKUMA NOVELS



長篇青春冒險ロマン

不定期エスパー

5

エクレーダ
交戦

肩村卓



心間書店

TOKUMA NOVELS

目次

エクレーダ

7

交戦

140

本文插画・小林智美

エクレーダ

ぼくたちは、エクレーダに乗っていた。

このエクレーダという艦名は、カイヤツにある湖の名前なのだ。とりたてて大きいわけでもなく、格別の名所もない湖なのである。ただ伝説によれば、かつて人々が開拓に入ったものの、ある年、全く雨が降らず……エクレーダという少女が雨乞いをして、十日間絶食をして死んだ。するとその直後から大雨になり、何十日も降りつづけて、とうとう湖になってしまった——のだそうだ。この伝説が何を語ろうとしているのか、ぼくにはよくわからない。この種の話にはしばしば教訓がついて廻るものだが、それだって、よほどひねくれた深読みをしなければ、理屈づきもできないような気がする。とにかくそんないい伝えが残っているというだけの、何ということもない湖なのだ。

湖の名が、その少女エクレーダに由来するとあれば、艦名はむしろ少女の名をとったものではないか、と、

考える人がいるかも知れない。だがそうでないことは、カイヤツ軍団の艦艇の名がカイヤツやカイヤントの地名をとってつけられており、地上戦隊の艦には一般に湖の名前が与えられていることからあきらかである。

なぜぼくたちの艦がそういういわば平凡な湖の名を持つことになったのかといえば、ぼくたち第四地上戦隊が新編成の戦隊であり、艦艇も新造のものであって、有名な湖の名前はすでに種切れになっていたというわけであろう。いや……これはいい過ぎだったかも知れない。エクレーダ湖は一応は人々に知られてはいるのだ。あまり特徴がないというだけのことである。それに艦そのものの性能は新造だけに、いろいろとあたらしい工夫がほどこされているという話なのだ。妙にひがんだいいかたはすべきでなからう。

ともあれ。

ぼくはこれで何度か宇宙船に乗ったことになるが、宇宙船とは奇妙なものだとの感覚をいまだに捨てることができない。

それはおそらく、ぼく自身の生い立ちと宇宙船とのかわりに、無関係ではないと思う。

ずっと前にも述べたが、小さい頃のぼくはたびたびカイヤツ一級宙港へ行つて、宇宙船の群を眺め、やがては自分もあつた船で宇宙を旅することになるのだと、夢をふくらませたものであつた。いうならばきわめて素朴にあこがれていたのだ。

これが順調に、当然のように宇宙船に乗り込む身になつていたら、はじめの驚きや違和感もしだいに消え、何となく、こういうものだと思えるようになっていたのではないか——との気分がある。ま、あくまでもこれはぼくの、そうならなかつた状況に対する想像だから、実際にどうであつたかは、何ともいえないが……。

しかし、予備技術学校を放り出されたあとのぼくは、宇宙船とか宇宙旅行への関心を失つてしまつた。自分が技術者としての道を閉ざされ脱落して、多分そんなものとは生涯無縁になるだろうとの諦めが、そうさせたのかもわからない。おのれをみじめにしたくない自己作用ともいえる。ともかくそのとき、いったん背を向けたのは事実だ。

ところが、思いもかけぬ事情でしかも否応なしにぼくは宇宙船に乗ることになった。エレスコブ・ファミ

リー号によるカイヤント行きがそれである。ぼくはエレンの護衛として緊張をゆるめるときもなく、時間を過ぎなければならなかつた。

以来、宇宙船といえは緊張のイメージがぼくにつきまとつてゐる。

そればかりか、カイヤツIIIにおいては、さらに別の感じがあつた。

カイヤツIIIは、エレスコブ・ファミリー号などとは比較にならない巨船である。それ自体がひとつの社会であり、世界であるともいえるのだ。実際、船外では宇宙服の助けなしには生きてゆけないのだから、これは誇張でも何でもない。もちろんこのことはエレスコブ・ファミリー号でも同じであつた。同じだったが、エレスコブ・ファミリー号ではぼくの感覚で船全体をとらえることができ、しかも宇宙空間を突つ走る乗りものの印象があつたのに反し、カイヤツIIIは大きくて、それだけで社会を構成してゐたのだ。のみならず、これだけ大きい一世界であるのに、やはり外は宇宙空間であるとの意識のせいで、いやでもこれは運命共同体であり、何かがおければ全体に影響があるとの閉塞

感が強くなるばかりだったのだ。拘禁され査問会を経験したりすればなおさらのことである。宇宙空間の中のごく小さな世界の癖に、ぼくを制限し、抑圧する場なのであった。

ネイトリスバからネイトリバトワまで他の入隊志願者と共に送られたとき、ぼくはそれまでの感覚の上に、またひとつあたらしいものをつけ加えることになった。ぼくたちはひとつの大部屋で寝起きしたのだ。閉じ込められた中で、対立したり憎み合ったり傍観したりしたのである。宇宙船内という限られた空間のそのまた一室で、お互いに心理的にも物理的にも距離を置くことがかなわず、うるさい人間関係がつづくのは、耐えがたいことであつた。どうやら宇宙船というものは、それを細分化することで、人をいよいよいらさせ、無用の相剋^{きさく}をもたらずのにはあるまいか、というより、本質的に人間の気持ち^{きもち}を歪める要素があるのではないか——と、思つたりしたのだ。

繰り返しになるが、ぼくが宇宙船に乗るにしても、与えられた席にゆつたりとすわり旅をたのしんでおればいい……すくなくともそれが普通である境遇にあつ

たならば、決してこんなことにはならなかつただろう。そうなのだ。

宇宙船とはぼくにとって、本能的にたえず緊張し、運命共同体意識のもとに抑圧と閉塞感をおぼえ、お互い異常な心理状態の中で接しなければならぬものと化していたのであつた。

それが今度は兵員として、前線へ出るために宇宙船に乗っているのだ。これまでは宇宙船そのものの危険は、ないか、ないに等しかつた。通常の宇宙旅行の危険性以上の心配はなかつたのだ。今度は違う。前線へ出れば……いや前線に到着する前にだつて、敵に攻撃されるおそれが充分にあるのだ。襲われたからといって、必ずしも艦が破壊されぼくたちが死ぬとは限らないであろうが、場合によっては一瞬にして艦が爆砕される可能性も存する。しかもこの不安は、乗船中ずつとつづいてゐるのだ。ただでさえ宇宙船について奇妙な重い気分を持っていたぼくには、ひどい圧力であつた。乗船したはじめの頃のぼくは、きつと顔色も良くなかつたろうし、ふだんこととなる言動をしていたに相違ない。ぼく自身がそうと自覺していたのだ。

けれども、時日が経つにつれて、ぼくはそれほど
圧迫は感じなくなつて行つた。これは不思議なようだが、本当である。そうなった理由の第一は、乗艦して
気が重くなりそれでも耐えているのは何もぼくだけではないらしいと悟つたからであつた。みんな、大小の
差こそあれ、ぼくと似たような状態にあつたらしいのだ。意外なことにそれは、ぼくのようにはじめに出撃
した者だけでなく、戦闘体験のあるベテラン——たとえばガリン分隊長ですら例外ではなかつたようなのである。でもそれはそうだろう。いくらベテランといえ
ども……というよりベテランで戦闘経験があればなおさら、前線へ赴くというのに上機嫌でへらへら笑つて
などいられないはずである（もともと、ぼくは当初、何人かの兵隊が何かといえは高声立てて笑つたり、や
たらに他人の肩を叩いて励ましたりするのを目撃したが、それは強がりであり、あるいはヒステリックな反応だつたようである。その証拠にかれらは二、三日経
つとすっかりおとなしくなつてしまつた。あるときなどはそんな真似をしていたひとりがだしぬけにわつと
泣きだすのを見て驚いたこともあつた）。

——という、他人の様子によつていささか気が楽になつたこともあるが、何といつても大きかつたのは慣れであらう。人間、心配をつづけていると、気持ちをまぎらすために日常の仕事に積極的に取り組むものだし、神経もいつしかしびれたようになって、そう四六時中は考えなくなるものだ。心理学的にはこれこそが抑圧であり、こんなことがある程度以上つづけば、異様な言動を示しはじめたり暴発したりするとされているのであらうが……それを強引に統制しているのが軍隊の規律であり、ひいては戦闘時にそのエネルギーを爆発させるように仕向けるのではないかと、ぼくは思う。

そんなわけで、エクレーダ上の兵員となつて数日のうちに（心底の深いところではともかく）ぼくは表面的にはどうやらふだんの自分に還り、艦内の生活にも順応して行つた。

ところで……ここでひとつ、告白しておかなければならない。

その時分からぼくは、自分のものの見方に、従来はそれほど明瞭とはいへなかつた要素が浮かびあがり、

強まりは始めるのを自覚していたのだ。

一言でいえばそれは、自己が属しているものを相対的に客観的にとらえるという意識である。

ぼく自身を、ではない。

ぼくが属しているものを、だ。

ぼくは、自分自身については比較的早いうちに突き放して眺めることができるようになっていた。親の庇護を失い、自力で道を拓かなければならなくなった人間は、しばしば壁にぶち当たる。そこに壁があるからと泣き言をいっても仕方がない。甘えは許されないのだ。自立して行こうとする限り、いやでも目の前の状況を分析し、対応を図らねばならない。その分析と対応には、当然、おのれが何であり、どう位置づけられる存在であり、何が可能か——との把握と認識が欠かせないのである。自分自身を実体以上に高く評価し周囲の無理解や非情さを憤ったところで、何の解決にもなりはしないのだ。おのれというものを冷静に見直し、どうすれば自分が壁を突破できるかを考え、必要とあればおのれの能力を高めたり自己変革もやらなければ、ひとり立ちなどではしないのである。ま、世の中に

はそんな真似をしなくても結構うまくやっている人間もいるのだが——それはたまたま幸運に恵まれたつづけているか、自分が何かの保護下にあるのを悟らない、あるいは認めようとしない連中なのではあるまいか。ぼくにはとてもそんなことは期待できなかったし、もしそうなったとしても、いさぎよしとはしなかったであらう。何といわれようと、ぼくは自分の経験を通じてつかんだおのれの流儀をつらぬくしかなかったのだ。ぼくが真面目過ぎるとか依怙地だとか見られるとすれば、こういった考え方や生き方のせいなのかも知れない。何にしてもそんなわけで、ぼくは自分を第三者の目から見てもうだろうと値踏みをしたり、自分が全体の中でどんな立場にあるのか見極めたりするのを、割合抵抗なくできるようになっている。それでも他人からすればまだまだ不充分かも知れないが……すくなくとも、つとめて自分を突き放して眺めるようにはしているのだ。

しかし、自分自身をそんな風に見ようとするあまり、ぼくは、自分が置かれている環境を過大評価していたのではあるまいか？ まずおのれが属する、または属

することになる場を見定め、そこでどうやって行くべきかを考える結果、環境を絶対視していたところがあったのではないか？

ファイター訓練専門学校にいた頃のぼくは、良き学生であろうとした。模範生になろうなどという気ははじめからなかったけれども、ファイター訓練専門学校の学生にふさわしい実力をつけ、できることなら腕で上位を競ってもみたい、と、努めたのだ。ぼくはファイター訓練専門学校に属し、ファイター訓練専門学校がぼくの全世界だった。

エレスコブ家の警備隊員としてのぼくは、結果としてはエレスコブ家から放り出されたにせよ、ちゃんと務めたと信じている。あんなエスパー化という不運（ことエレスコブ家のエレンの護衛員としては、あのとときあなつたのは不運というべきであろう）やトリントス・トリントの持つて廻ったしっぺ返しがなかったら、ぼくは今でもれっきとした護衛員として勤務しているはずである。エレスコブ家にいたときのぼくは、エレスコブ家警備隊員の枠をはみ出さないようにしていた。ぼくはエレスコブ家に属し、エレスコブ家がぼ

くの基盤だったのだ。

ネプトラード連邦軍カイヤツ軍団の兵士としても、ぼくは真剣に努力し、一人前の兵士になろうとした。現在でもそうである。でなければみんなに仲間として扱ってもらえないのみか、身につけるべき事柄を身につけなかったために前線で生命を落とすかも知れないからだ。ぼくは自分から望んで連邦軍に入ったのではないが、入った以上はその一員になり切ろうとしたのであった。ぼくは連邦軍に属し、連邦軍がぼくの全世界なのだ。

と、ここまで述べてくると、どこか変ではないかと感じる人も多いのではあるまいか。

ファイター訓練専門学校にいたときは、ファイター訓練専門学校がぼくの全世界であり、エレスコブ家警備隊に勤めていたときは、エレスコブ家がぼくの基盤であり、今は連邦軍がぼくの全世界だとなれば……ぼくにとってそれぞれはどんな関係にあるのだ、ということになるからだ。出てしまったあとは、そこはもう何の関係もないのか、と、問われかねない。

少し前までは、ぼくはこのことを深くは考えなかった。

た。人間、何をするにも過程とか時期といったものがある。あつて、終つてしまえば仕様がなないのだ、と、漠然と解釈していたふしがある。その場その場で全力を傾注してゆくしかないのだし、それでいいのだ、とも思っていた。

ただ、誤解を避けるためにいっておくと、だからといってぼくは過去を捨てて顧みなかったのではない。むしろぼくは過去に愛着を抱き、過去のあれこれにとらわれがちなほうなのだ。だからエレスコプ家の警備隊員だった頃も、その暇があればファイター訓練専門学校を訪ねたりしたし、エレスコプ家に対したつて、あんなかたちで追い出されたことへの怒りはあるものの、エレンや第八隊の隊員と共に任務についた日々、なかんずく死んだハボニエと一緒にいた日々のことは、今でも思い出すたびに、懐しくなるのだ。

しかしこれは、ぼくの気持ちの問題に過ぎない。そうした感傷を抜きにして考えれば、やはりぼくがそのときどきに自分が置かれた立場の中で全力をあげてきたというのは、一種の利己主義であり、おのれが属する環境を絶対視してきたといえるのではあるまいか。

ぼくは、自分が属している場では、その場にふさわしい人間になろうとし、そこを出たあとは、懐旧はあるものの過ぎ去った通り抜けた世界と位置づけ、ひとつ、またひとつと置いて来ながら、それぞれを対等のものとして捉えてきた。当然ながらそうなると、現在自分のいる場ではむろんのこと、通り抜けてきた場についても、内側からの目のほうが優先する。かつてそのメンバーだったとの意識がそうさせるのである。

だが、それで本当にいいのだろうか——と、ぼくは思うようになったのだ。

自分自身を突き放して眺めるように、自分の所属する、あるいは所属した場を突き放して眺めるようにすべきではないのか？ もちろんぼくはこれまでもしばしばそうした観点に立ちはした。が……それは当事者としての内部からの目とつねにないまぜになったものであり、独立したものとはいえなかったのだ。

——と、いうと、矛盾しているではないかとの声が聞えてくるようである。

ぼくはたびたび、当事者としての視点の効用を説いてきたからだ。当事者でなければ見えないものがあり、

それは関係外の者がいくら文句をつけ非難しようとも、
厳然として存在するのであるともいった。

このことを、ぼくは否定するつもりはない。当事者の目、内側からの目は大切だと信じている。

だが、当事者であり内部の人間である者が、中途半端に外からはどう見えるだろうかと推測するのは、当人が考えるほど正確なものにはならないのではあるまいか？ 当事者の立場、内部の人間の立場にこだわっている限り、そうした内部批判や外からどう見えるだろうかとの臆測は、ともすれば自己弁護につながる独善的なものになりがちなのだ。はじめから内部の目が主であり、臆測が従という関係が成立しているからである。自己の属する場を絶対視していれば、なおさらだ。

裏返しに蛇足で申しわけないが、これは逆の立場からでもいい。つまり、外部の人間が生半可にわかつたつもりで内部を推察し論断したところで、的を射たものにはなり難いということだ。ファイターとして、家の警備隊員として、また連邦軍の兵隊として、ぼくはこの種の評論に随分いらいさせられたものである。

ではどうしろというのか——となるが、だからぼくは、当事者であることから全く離れた無関係そのものとしての目を、別に持つべきではないだろうか、と、いいたいのだ。それも、立脚点をおよそ異にした、きわめて客観的な見方であればあるほどいい。冷酷なまでの大きな立場から相対的にとらえるという、もうひとつの視点を併せ持つことが必要なのではないか——との意識が、ぼくの中に浮かびあがり強まりはじめていた、と、いうことなのである。

そんな、いわば対極的なふたつの見方を、一個の人間が同時にすることなんて、可能だろうか？

正直いって、きわめて困難ではないかと、ぼく自身も思う。

が、……なろうことなら、そうでありたいのだった。ぼくがこんなことを考えるに至ったのは、それ相応の事情がある。

かつてぼくにとって、カイヤツ府はすべてであった。ぼくはカイヤツ府の中にいて、他を知らなかったのだ。ぼくはぼくなりにカイヤツ府の良いところも悪いところも認識しているつもりだった。

これはこれで、問題はない。カイヤツ府の住人でありカイヤツ府を出たことのないぼくにはその通りだったのだ。

しかしぼくは、エレン・エレスコプの護衛員を務めるようになってから、カイヤツ府内でもこれまで行つたことのない場所へ、しばしば赴くようになった。経済省や大統領官邸や他の家々や、その他さまざまな場所へである。移動はたいいてい車でだった。結果、ぼくの目に映るカイヤツ府の印象がだいぶ変わってきたのは否めない。

その次には、カイヤツ府近郊の工業地帯。

やがて、カイヤツ府を遠く離れたゲルン地方。……へべ地方……。さらには海を距てた南西大陸のハルアテ東南地方へと、旅がつづいた。

この旅で、ぼくはそれまでまるで知らなかった多くの事柄や現象を見聞きした。今またここで詳述してもうるさいだけだろうから端折るが、それらはぼくに衝撃を与え感慨を催させたのだ。カイヤツといつてもこんなところがあり、こんなことが行なわれているのか、と、信じ難かったのも一再ではなかったのである。

この経験のあと、あらためて見直したカイヤツ府は、もう、ぼくにとつて以前のカイヤツ府ではなかった。むろんぼくの頭の中には、かつてカイヤツ府しか知らなかった頃の、そのイメージがちゃんと残存してはいたが……それとは全然違う目で見えるようになった自分に気がついたのだ。

——と、ここまでいえば、あともほぼ想像していただけなのではなからうか。

そうなのだ。

ぼくは、カイヤントへ行つたことによって、カイヤツを以前とはことなるとらえかたをするようになった。カイヤントへ行かなければ決して考えなかったであろうような目で、カイヤツを見ることができるようになった。

カイヤツに対してだけではない。

カイヤントからの目を持ったお蔭で、ぼくはネイトⅡカイヤツというものを、従来とは別の見地から考えることも可能になった。

カイヤツⅢに乗ってからも、同じである。

連邦登録定期貨客船に乗っている身でネイトⅡカイ